

座談会 わらび座

3

舞台と農業にこだわった 修学旅行 “40年の想い”

合資会社工ニコ農園 販売部長
(わらび座に45年在籍)

大和田しずえ

株式会社わらび座 本社営業部 部長
(教育旅行担当)

阿部 裕志

株式会社わらび座 本社営業部 企画担当
(インバウンド担当)

中島 祥崇

秋田の地に根を張り、文化と観光を融合した本格的な複合文化施設「あきた芸術村」を運営する「株式会社わらび座」(以下、わらび座)。40年の長きにわたり、グリーン・ツーリズムという言葉も一般的でない時代から、観劇・ワークショップに、農家体験をベースとした修学旅行を展開してきた。農家と生徒たちの交流がもたらした真の効果、わらび座の存在・役割などについて、第一線で活躍されている方々に伺いました。

東京の若者と秋田との出会い〜わらび座の歴史

— わらび座は1951年(昭和28年)に創設され、1953年(昭和28年)、秋田に拠点を移します。その歴史について、最初にお話しただけですか。

大和田 創設メンバーは戦後、文化の力で新しい日本をつくろうと東京で音楽活動を始めていましたが、民謡などを歌ううちに日本の文化を基礎から学びたいと、多くの民俗芸能が残る東北を目指しました。特に秋田は、民謡や民俗芸能の宝庫として注目していた地域でした。

— どのようにして、秋田の人たちに受け入れられたのでしょうか。

大和田 すんなりとはいかなかったと思いますが、秋田の方々は、貧乏だが思いだけは強い若者たちを迎え入れ、食べるものや暮らす場所も提供してくださった。そういう志を受けたという土台が東北、秋田の農村にあったことですね。飢えた者には食べさせ、貧しい者は励まそ

うという優しさがここの風土にあったのでは。

— 自分たちの文化を真摯に学ぼうという姿勢が、共感を得たのかもしれませんね。

大和田 不慣れた農作業を手伝い、夜は笛や三味線を教わるというひたむきさが伝わり、門外不出と言われた芸能も教えていただけのようになったそうです。やがて小学校の体育館や公民館に呼ばれて、歌や踊りを披露するようになり、それがラジオ



あきた芸術村遠景



わらび劇場 外観

に取り上げられ、いろいろなどところから声がかかるようになったと聞いています。

——1974年（昭和49年）に自前の「わらび劇場」ができるまで、どのような活動を？

大和田 公演チームが全国各地を一年中巡演していました。トラックに舞台道具一式を積み込み、役者たちは中型バスとマイクローバスで移動しながらホールや体育館で公演しました。このスタイルはわらび劇場で常設公演をスタートさせても変わらず、現在も続けています。

受け入れた側の感動が大きかった農家体験

——その後、わらび座では修学旅行生を受け入れ、農家体験がスタートします。40年近くの歴史を持ち、これまでに通算20万人の生徒が参加しているそうですが、きっかけは何だったのでしょうか。

大和田 最初の修学旅行の受け入れは1975年（昭和50年）、岩手県の小さな公立中学校の分校でした。前年に東京へ修学旅行に行ったら、生徒たちが自分たちの暮らしとの違いにショックを受け、失望してしまつたのです。自分たちの住んでいるところに誇りを持ってほしいからと、先生方から依頼をいただきました。その時、生徒たちが披露してくれた地元の伝統芸能は本当に素晴らしく、お迎えしたわらび座のメンバーは大感激でした。

——そこから、どのように広がっていったのでしょうか。

大和田 1977年（昭和52年）から受け入れが始まり、約40年続いて

いるのが東京の私学一貫校、和光学園の中学校です。先生方から「わらび座で農村の文化に触れさせたい」「第一次産業に携わる人々の現場で、その人々の生き方から学ばせたい」という2つの希望が出されました。

——農家への依頼はどのようにされたのですか。

大和田 依頼から準備に2年間かかりました。わらび座は1971年（昭和46年）に株式会社化しましたが、当時の幹部3〜4人で農家さん

や農協、役場にお願ひに行き、試行錯誤しながら26軒の農家に受け入れていただきました。農家体験の修学旅行の受け入れは全国初だったと思います。

——生徒さんや農家さんの反応はどうだったのでしょうか。

大和田 当時は日本の農業政策が大転換し、減反政策が始まって6〜7年経った頃でした。「農家は継がなくていい、勉強していい学校に入れ」と子どもにも農業を手伝わせな

わらび座 企業概要

本社所在地：〒014-1192 秋田県仙北市田沢湖卒田字早稲田 430
 設立：1971年3月22日（劇団創業は1951年）
 代表者：代表取締役社長 山川龍巳
 売上：21億円（2015年度）
 内訳：劇団収入30%、観光事業（ホテル、レストラン）50%、農業・教育・ビール生産他20%
 従業員：240名 資本金：4,900万円
 企業理念：衆人愛敬（しゅにんあいぎょう）「私たちは心を育てるビジネスを通して広く社会に貢献します」

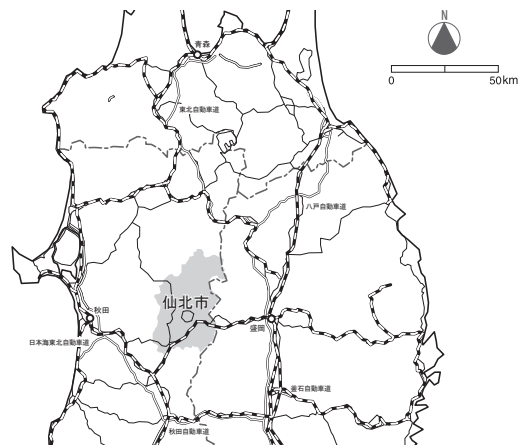
事業内容

1. 興行 わらび劇場、国内外での公演を年間約1,000ステージ実施
2. 「あきた芸術村」の企画運営
3. 男鹿国定公園 男鹿桜島リゾート「HOTEL きららか」の運営
4. 真木真昼県立自然公園 川口温泉「奥羽山荘」および「太田ふれあいの里」「モリボの里」の運営
5. 秋田駅ビルトピコ内「えきのピアパル MANMA」の運営
6. 仙台市の「Dining Kitchen 田沢湖ビール SENDA」の運営
7. 提携劇場「坊っちゃん劇場」（愛媛県東温市）への作品制作協力
8. 旅行業



ハルららん

図 秋田県仙北市の概要



総面積	1,093.56km ²
人口	27,576人 (2016年11月現在)
産業別就業者数	建設業 (1,703人)、農業 (1,658人)、卸売業・小売業 (2,124人)、製造業 (1,826人)、宿泊業・飲食サービス業 (1,359人) など
主なアクセス方法	飛行機 <ul style="list-style-type: none"> 羽田空港～秋田空港まで1時間5分 羽田空港～大館能代空港まで1時間10分 関西空港～秋田空港まで1時間25分 秋田空港～「あきたエアポートライナー」を利用して角館まで60分、田沢湖まで95分
	JR <ul style="list-style-type: none"> 東京駅～田沢湖駅まで2時間58分、角館駅まで3時間12分 仙台駅～田沢湖駅まで1時間15分、角館駅まで1時間29分 盛岡駅～田沢湖駅まで30分、角館駅まで44分 新大阪駅～田沢湖駅まで約6時間
観光資源	<ul style="list-style-type: none"> 武家屋敷、松木内川堤のソメイヨシノ、武家屋敷通りのシダレザクラなどの角館地区 田沢湖や秋田駒ヶ岳などの大自然を誇る田沢湖地区 農産村風景が美しく、グリーン・ツーリズムが盛んな西木地区
観光客数	4,544,177人 (2015年度)

資料：平成22年国勢調査結果、秋田県観光統計および仙北市ウェブサイトなど

時代に入っていたのです。そんな時に都会の子たちが来て喜々として稲刈り、芋掘りをする。ある農家のおじいちゃんがよく言っていました。稲束を運んでいた女の子が「稲束って、さらさらっていい音するね」と言うんだ、と。何回も稲刈りしてきたけどそんなふうに感じたことなかった、ものすごく感動したと。

もう農業は終わりだと思っていた

時代とともに変えるもの、変えないものを見定める

農家の人たちが、やっていてよかった、素晴らしいものだと再認識できたんですね。生徒さんたち以上に、農家さんたちの受けた感動や刺激が大きかったかもしれません。

大和田 1回目の修学旅行について、和光学園の先生方がいろいろな

集まりで報告したり、教育新聞に寄稿されて口コミで一気に広がり、あちこちから修学旅行の申し込みが増えました。わらび座では、受け入れのためにホテルも造りました。

阿部 1〜2泊という日程が多いので初日はミュージカル観賞と踊り体験、2日目は降は農家体験という基本日程が出来上がりました。公演を見た後、出演していた役者がクラスごとに踊りを教えます。踊り体験で

クラスが一致団結するのです。その後、農家に向かうという流れですね。

——すぐに農家に直行するのではなく、クラスに一体感を持たせる、そうしたプロセスも大切ですね。

阿部 最近はそのようなプロセスを通して、先生たちも子どもたちの新たな一面に「気づく」ことが多いです。ちよつとやんちゃな子が農家のお父さん、お母さんと一番仲良くなり、率先して農作業を進めたり、絶対踊らないと思っていた子が真っ先に踊ったり。先生たちがよく驚いています。

大和田 生徒たちも時代によって変化していて、かなり荒れていたのが80年代。90年代はいわゆるシラケ世代で、受け入れも一番悩みました。踊り体験の内容を大きく変えたのも1995年(平成7年)です。それまでは腰を深く落として踊る重厚なソーラン節を教えていましたが、ある学校の生徒たちは全く反応がなく、まるで生徒たちと私たちの間に透明なバリアが張られたようでした。「これじゃ駄目だ」とみんな



NEWソーラン節

で夜な夜な話し合い、今の子どもたちは音楽性が豊かだから、アップテンポな曲でのりやすくしようと考えたのが、今に続いているNEWソーラン節です。

——時代と生徒の変化に応じて、体験内容を変えたのですね。

大和田 踊りを教えるというより、生徒たちが表現したいけど外に出せずにいることを引き出そうという視点に立って、間奏のアレンジも自分たちで考えてもらっています。

阿部 ただ、農家体験は基本的に

変わってないですね。生徒の数は今も昔も、農家1軒当たり3〜5人です。農家さんが全員に目が届き、みんなと話ができる人数だと思います。

大和田 お世話になる1カ月前くらいに、班ごとに写真と手紙を農家に送ってもらおうようにしています。農家さんは台所に貼ったりして、来るまでに名前を覚えるんです。それは和光中学の最初の受け入れの時に先方からお願いされたことで、別の学校を受け入れる時にも応用しています。

インバウンド対応にも生きる長年の受け入れ経験

——農家さんはボランティアで生徒を受け入れているのでしょうか。

阿部 学校さんからお預かりして謝礼を払っています。でも農家さんが受け入れているのは、お金が目的ではないですね。わらび座としても農家体験では正直、利益はないんです。ここ数十年、料金も上げていません。

大和田 どんな時代も、農家さん

たちは「子どもは金儲けの対象にしちゃ駄目だ、めんこいからやるんだ」と言って交流を続けてきていますね。

——そのモチベーションはどこから来るのでしょうか。

大和田 受け入れを始めた頃の話ですが、農家の嫁は毎日食事を準備して、田んぼや畑で働くのが当たり前で誰も褒めてはくれません。でも、都会から来た子どもたちは「お母さんのご飯、すごくおいしい」と褒めてくれて、ある女性は「ただの農家の嫁が、人間になった」と感じたそうです。生徒たちとの交流で受け取るものも大きく、お金には代えられない経験が得られることが長続きする理由ではないでしょうか。

——どれくらいの農家が修学旅行を受け入れているのですか。

大和田 今まで受け入れていただいたのは累積で700戸です。高齢でやめてしまったところもあります。2代目が引き継いだ農家も多く、中には4代目というところもあります。

す。生徒さんの中には、その後、家族旅行で来てくれたり、大人になってから新婚旅行で来たりする方もいます。

——いろいろな形で、時代を超えてつながっているのですね。

大和田 和光学園の校長先生のご提案で、9年前から米の産直も始めました。校長先生から「お世話になっている農家さんからお米を買いたい」というお話があり、わらび座が注文のファクスを受けて農家に転送し、農家から米を宅配業者が集荷



農家体験

するシステムをつくりました。

そして、中学高校だけでなく、家でご飯を食べる機会が多い幼稚園児や小学生の家庭からも反応があり、今は二十数軒の農家が年間2万kgを販売しています。農家さんたちは最初「校長先生の気持ちはありがたいが、米は売れないだろう」と期待薄だったのですが、今は注文が来ると張り切って「次は特別栽培米の認証を取ろう」など、新しい挑戦への意欲につながっています。

阿部 2013年(平成25年)には、アメリカの「People to People」というプログラムで64人の中学生を17軒の農家が受け入れ、農家に3泊、わらび座に1泊して農家体験をしました。欧米の子どもたちは初めてだったので、農家さんたちは「大丈夫だ。しゃべれば何とかなる、誰が来ても同じだから」と全く動じなかったのだ、すごいなと思いました。

大和田 伝えたい気持ちがあれば身ぶり手ぶりで伝わる。「東京の子たちだって、言葉ちゃんと通じなかったけど、分かり合えたから」と

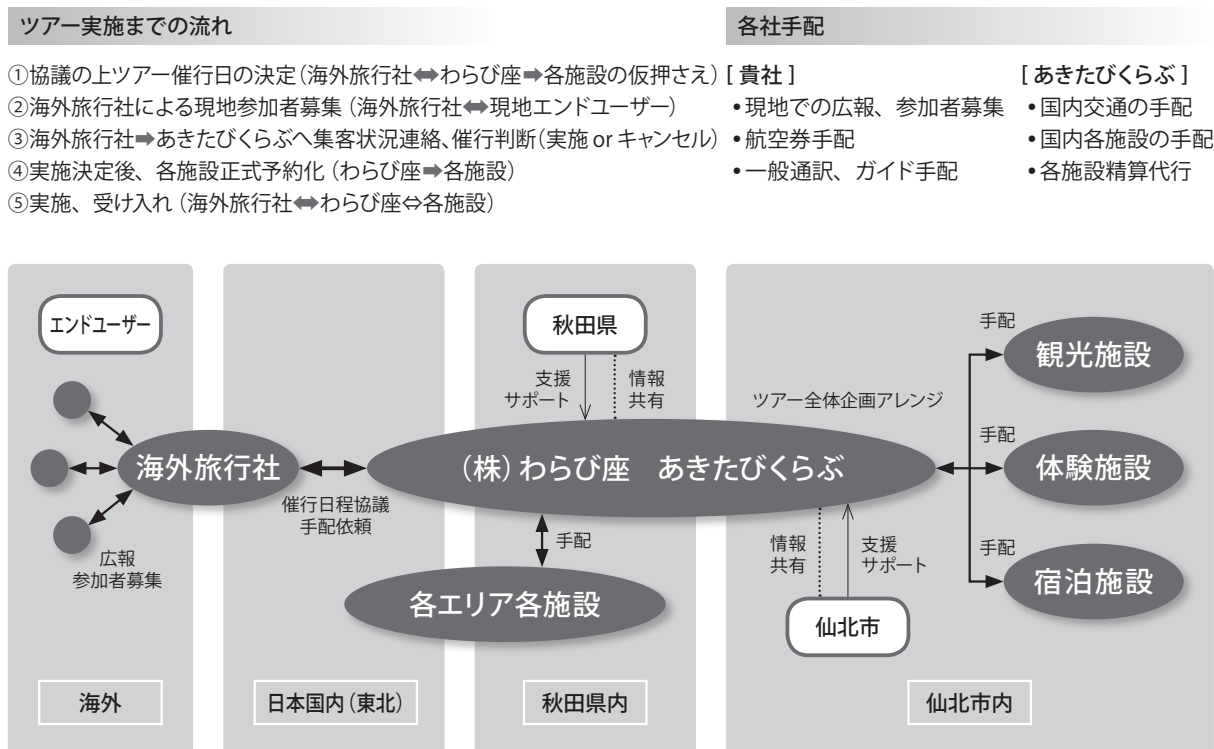
(笑)。長年の経験が、インバウンド受け入れにも生きているなと思います。

中島 外国人旅行者は仙北市内においても増加傾向にあります。この流れに対応するため、わらび座では社内に「あきたびくらぶ」という旅行事業部門を立ち上げ、2016年4月に第2種旅行業者の登録を行いました。農家体験は、外国の方々にも人気のコンテンツです。これから私たちがランドオペレーターとして、地域と世界をつなぐ役割を担えればと思っています。

—— 昨年3月には、仙北市とわらび座は、文化振興や国際交流、観光振興などの7項目で連携し、地域の活性化を目指す「包括連携協定」を結んでいますね。

中島 市とはこれまで以上に密な情報交換をしようという話をしていきます。特に地方におけるインバウンドは、行政だけでも民間だけでも難しいところがありますから、お互いの役割を明確にしなが、前進していきたいと思っています。

あきたびくらぶ インバウンド 事業フロー案 (図)





中島祥崇氏



阿部裕志氏



大和田しずえ氏

コーディネーターという 役割の重要性

——これまでの取り組みを通じて、農山村における観光の課題は何だと思えますか。

大和田 長年やってきて感じるのは、受け入れ農家には注目が集まっても、学校と農家を結ぶコーディネーター機能はほとんど注目されていないということです。しかし直接、旅行会社と農家がやりとりするのはほぼ不可能で、地域でコーディネーターする存在がなければ回っていきません。

どの地域でも農家と観光を結ぶ場合、その役割は絶対必要だと思えます。担い手は私たちのような民間企業でも行政でもNPOでもいいのですが、地域の展望をちゃんと持つて担える機能を持たないといけないのでは。

中島 農家の皆さんの生活と観光のバランスも大事で、どちらかに偏り過ぎないように、それぞれの要望を上手く調整しながら落とし込む。そこに必要なのがコーディネーターとい

う役割だと思えます。

わらび座の場合は多角経営をしているので、農家体験単体で収益を上げることをほとんど考えていませんが、コーディネーターだけを仕事として成り立たせるなら、ちゃんとそれも含めてお金がまわる仕組みを作らないと難しいと思います。でも、今の補助金などの仕組みは、受け入れる側か、連れてくる側かのどちらかが対象のものがほとんどですね。その間に立つ仕事に対する支援の仕組みがまだ充分ではないと感じています。

大和田 私も以前、農家体験に付随したNPOを設立して国の補助金を活用したりしましたが、そういうお金が使えるのは交通費やコピー代などの実費だけで、事務局の人件費が出ないんですね。いわばボランティアなので、全国でこういう取り組みをしている方たちは同じ悩みを抱えているのでは。関わっている人たちが楽しく取り組みを展開していくためにも、コーディネーター的な役割を大事にする仕組みづくりができないかと思えます。

——農業と観光を結ぶ役割の重要性、コーディネーターする人たちにもきちんとお金がまわるにはどうすべきかという、とても大事な示唆を最後にいただきました。どうもありがとうございました。

聞き手：観光地域研究部 吉澤清良
編集協力：井上理江

